

Nonstandard と Analogy

井 崎 宏 一

表題の Nonstandard という用語について一言しておきたい。言語の本質をふまえてものをみるならば、ある言語でなにか「標準」かと問うこと自身が、すでに異常で無意味な態度である。それから外れたものはすべて醜くて、悪いという偏見が「標準」という語につきまとうのがふつうだからである。標準語とされているものは、社会的、地域的方言にすぎないのであって、それはある言語圏の中での政治、経済、芸術、教育の伝達のための共通の道具と見ることができ、標準語と、それに対する方言は、それぞれの果す言語機能からみれば、優劣はつけ難く、いずれが正しいということもできなくて、区別はもっぱら社会的、政治的な考慮に支配される。必要上、その権威を認めざるを得ない学校文法は、貴族的、保守的精神が、自己保存の必要からつくりだした規範的な規則の体系であって、過去の因襲の残滓だともいえる。記述的見地からいうと、文法書は言語の解剖学であり、生理学を教えるものでないとは至言である⁽¹⁾。つまり、文法では、まとまりをもち、そのまとまっていることに意味がある文を、構成要素である一語一語に分解してその語をあげつらう。正しい文法を規定しようと自覚的に努力することは、じつは、まったく空しいものである。 *The Colloquial Style in America* の著者である Richard Bridgman は standard English という用語がもつ、19世紀的な「上品さ」「権力的保守性」の nuance を嫌い、vernacular という語をもってそれに代えている。かれは vernacular を “nation's common fund of language” と定義している⁽²⁾。Bridgman はとくにアメリカ文学に見られる英語について論じているのだが、作品において、現実の言語現象をできるだけ忠実に記録したいという欲求を重視し、その欲求の発現が、過去2世紀の英語の変化の歴史なのだといっている。19世紀初期には、権力と上品な伝統によって、卑俗で、無教養ときめつけられても仕方のなかった、おもに下層階級に属する作家たちの英語は、1世紀の間に変容し、洗練され、大多数のひとびとの承認を得るにいたった。もちろん、それと平行して、ひとびとの精神的変化、社会情勢の変化もあった。その結果、standard という用語があるべきものならば、それは再定義されざるを得なくなったのである。標準とはまず descriptive なものでなくてはならない。あるがままの言語の様態の認識と受容である。統計的に決定される集団的規範というものが標準の特性をなすことになる。ふつう standard に対する語は substandard であり、substandard の中には slang, dialect, vulgarism などが含まれる。接頭辞が示すように、これらのものは、上位にある standard の下に従属することになる。そこに見られる因襲的価

値判断の不当さを考えた上で nonstandard という用語を用いたのである。しかし、これとて、性質をあらわすのではなく、区別のための名称にすぎない。

少なくともアメリカにおいて、英語の変化は確実に起こってきている。しかし、それはけっして完成してはいない。おそらく変化は、止まることなく、未来に続くものと思われる。ある時点を切って、一応の standard を定める必要は、とくに辞書編纂者にとって切実なものである。編纂の原理の相異から、辞書と辞書の間に、齟齬をめぐって、批判や非難が行われることは当然のことである。1961年に Webster の第3版が出たときの論争は激烈をきわめ、反論がジャーナリズムをにぎわした。Descriptive な原理に忠実であるあまりに、大方の承認を得たとは思われず、広く批判的となっているような slang や新語の類を大量に載録したからである。反動として、prescriptive な方針の必要が認められ、Webster に対する解毒剂的な効果を意図して、American Heritage Dictionary が1969年に出版された⁽³⁾。いわゆる標準語をもたないアメリカでは、論理的に常識に訴え、また、pedagogic な目的に仕える規範を求める旧観念が抜けていない。その点では、日本の場合よりも一層保守的といえそうである。

辞書の他に、The Leonard Report も、そのような態度の現れとして説明できよう。Sterling A. Leonard は、usage に関して論議を呼びそうな230個の表現について、数十人の各界のひとびとに判定を依頼し、受けとった解答をもとに、統計的にそれらの表現を、1. Literary English 2. Standard, cultivated, colloquial English 3. Trade or technical English 4. Naïf, popular, or uncultivated English ——通常 vulgar と呼ばれるもの——の4つに分類した。判定を依頼したひとびとは、言語学専門家、the National Council of Teachers of English の会員、著名な作家、出版物編集者、代表的実業家、the Modern Language Association の会員、語学教師となっている。調査結果にもとずいて、それら230個の表現は 1. established, 2. disputable, 3. illiterate に分類されている。英語の研究者には、この調査は少なからぬ興味のあるものである。しかし、判定者の構成も問題であると同時に、この種の調査では、判断が主観的になりがちであり、好悪、偏見が入りこみやすい。その handicap に気づきながら、敢えて Leonard にこの試みを行わせたものは、かれの同時代に行われている usage の handbooks が、古めかしい、また、それ故に疑わしい権威に基づいたものであり、それよりむしろ、同時代の教養あるひとびとの実際の判断が、旧套的な syntax や logic に比して、一層確実な拠り所となるべきだという考えであった。辞書にしても、handbooks にしても、それらのもつ運命的な「時」の制約を Leonard は十分承知していた。同 report は、1932年に刊行され、後に Albert H. Marckwardt と Fred G. Walcott によって、新しい資料とともに手を加えられ、*Facts About Current English Usage* として刊行された⁽⁴⁾。ここでもまた、この調査の目的は、学校教師に、正確で信頼できる資料を提供することであることをうたっている⁽⁵⁾。Usage の拠

るべき規準を、無理矢理にでも定めてしまわなくてはならないといった態度がそこに窺われるのであるが、そのような不自然な努力を強いる動因は、アメリカ人の気質、歴史、文化のどこに求められるべきものなのであろうか。

記述的な立場から、アメリカ英語の方言は、通例、東部、南部、西部の3つに分けられるのだが、その間の差異は、もっぱら、発音について認められるといわれる。発音の方言的差異について教えてくれる辞書の一つに、Lewis Herman と Marguerite Shalett Herman の *American Dialects* がある⁽⁶⁾。これは学問的な音声学の研究成果ではなくて、舞台、映画、ラジオ、TVの演技者のための案内書と称している。特別に習得することを必要とする the International Phonetic Alphabet などを用いる代りに、英語の alphabet を独特の方式で用いた音声表記によって実用の便を期している。各地方独特の音調を示すために、高低の差を図示したり、音楽の譜表も用いている。この辞書では、方言は上の3方言よりもさらに細分されて説明されているのだが、編者が、標準語というものについて、懐疑的であることをその序文から知ることができる⁽⁷⁾。「各方言の比較の基本型は、中西部で話されているいわゆる “General American” である。各方言の説明を明確にするために、それとの比較がどうしても必要である。基本型—standard—がなくなくてはならず、それをもとにして音価の質的な判断をする。しかし、この standard は、アメリカ人の標準的発音 (the standard speech for Americans) と定めるわけにはいかない。なぜなら、どの地域の発音も、他の地域の発音と比較して、より正確だと考えることはできないからである。」いずれにせよ、方言間の差異は、もっぱら、発音について認められるのであり、意味、さらには綴字、統語法に至っては、はっきり認め得るほどの差異は、無いか、かりにあって、非常に局限されたものである。他の言語、また、イギリスの英語と比較して、方言らしいものが認められないことは、人口の移動が頻繁であったことによるものである。アメリカ英語で重要なのは、むしろ、階級方言といわれる slang である。Slang は、ふつう、都市生活の産物とされるが、アメリカの場合は、それが極端な形で発生し成長した。19世紀後半に、移民人口が急速に増加した都市には、いくつかの方言が生れたが、代表的なのは、イタリー人とユダヤ人によるものであった。地域的流動性、人口構成の複雑さ、社会的不安定、そして何よりも、伝統の基盤の欠如が原因となって、言語的混乱状態が生じた。アメリカ英語では、slang と dialect, cant, low speech, general colloquialisms などの間に差別が困難であると Partridge は指摘している⁽⁸⁾。

文学に現れる nonstandard を見よう。Slum 街を題材に、その slang を自由に駆使して、Stephen Crane (1871—1900) は、*Maggie* や *George's Mother* などの作品を書いている。詩的な rhythm と hyperbolic な装飾をもつ style を特長とする narration の部分に slang は出てこない。Slang は会話の部分に限られている。

He met a young man in the halls one evening who said to him : "Say, me frien', where d' d' Johnson birds live in heh? I can't fin' me feet in dis bloomin' joint. I been batting around heh fer a half-hour."⁽⁹⁾

19世紀初期に見られたような、作者自身の無教養による地方訛りや、misspelling、文法上の誤りは別にして、Mark Twain 以後、colloquialism が会話の部分に本格的に見られるようになった。ところが、それ以前のアメリカ英語は、この点でイギリス英語と何ら区別するべきところはなかったようである。J. F. Cooper (1789—1851) の Leatherstocking stories でも、登場人物は、非常に整った英語を話させられている。

"The boy is right! can it be that the Tetons have been caught in their own snares? Such things do happen ; and here is an example to all evil doers. Ay, look you here, this is iron ; there have been some white inventions about the trappings of the beast—it must be so—it must be so—a party of the knaves have been skirting in the grass after us, while their friends have fired the prairie, and look you at the consequences; they have lost their beasts, and happy have they been if their own souls are not skirting along the path which leads to the Indian heaven."

"They had the same expedient at command as yourself," rejoined Middleton, as the party slowly proceeded, approaching the other carcase which lay directly on their route.⁽¹⁰⁾

19世紀後半から、respectable writers といえるひとびとが、colloquialism を採用しだしてから、アメリカ英語の特長が育てられるようになった。19世紀初期には、粗野で卑俗といわれても仕方がなかったような vernacular も、洗練されて、無意味に装飾的でもなければ、はなはだしく粗野でもないといった、増加する中層階級のひとびとに自然に受け入れられる言語が作り出された。19世紀には、vernacular と standard の間に、はっきりとした区別があったが、20世紀になると、事実上、vernacular が standard の位置を占めたといってよい。Stephen Crane と同時代の作家の例を2つ示してみる。

"Sylvia takes after him," the grandmother continued affectionately, after a minute's pause. "There ain't a foot o'ground she don't know her way over, and the wild creatur's counts her one o' themselves. Squer'ls she'll tame to come an' feed right out o' her hands, and all sorts o' birds. Last

winter she got the jay-birds to bangeing here, and I believe she'd 'a' scanted herself of her own meals to have plently to throw out amongst 'em, if I hadn't kep' watch. Anything but crows, I tell her, I'm willin' to help support, — though Dan he went an' tamed one o' them that did seem to have reason same as folks. It was round here a good spell after he went away. Dan an' his father they didn't hitch, — but he never held up his head ag'in after Dan had dared him an' gone off."⁽¹¹⁾

"All right, if yeh feel like it, Jim." Smith replied, and they trudged along doggedly in the sun, which was getting higher and hotter each half mile.

"Ain't it queer there ain't no teams comin' along," said Smith, after along silence.

"Well, no, seein's it's Sunday."

"By jinks, that's a fact. It *is* Sunday. I'll git home in time f'r dinner, sure!" he exulted. "She don't hev dinner usially till about *one* on Sunday." And he fell into a muse, in which he smiled.⁽¹²⁾

これらの例に見られるように、vernacular ないし colloquialism は、もっぱら会話の部分に用いられ、dialect pronunciation の表記の工夫と、粗野な文法とともに、現実のひとびとの^{なま}生の発言をとり入れようとしているのに対して、narrator の声——いわゆる地の文——は、われわれに馴染みの、正統的な英語であることがふつうである。この意味では、vernacular は文学作品の中にとり入れられるに、控え目であったということが出来る。そうした事情を考慮してみると、*Huckleberry Finn* の全篇にわたる colloquialism は異色の存在である。dialect を用いる作家は、self-conscious であるのか、それとも self-assertive というべきか、一つの標準的用法から外れる語を用いるときに、quotation marks や、italics を用いて、その語を他と区別する習性があった。まったくの田舎ことばや、下層のひとびとのことばの模倣をたのしむという傾向もあったが、何よりも大きいのは、vernacular に魅力を感じながらも、作品の中で、それに完全な認可を与えることを許さなかった社会的制約である。当時は、正統的権威を付与された standard literary English に対する顧慮が、いまからみて、想像もつかないほど大きなものだったのであろう。narrator がその正統性を守ることは、最小限の義務であったと思われる。19世紀の文学のことばについて、Bridgman はつぎのようにいっている⁽¹³⁾。「会話においてしか、真のアメリカ人らしい声を聞くことができない。逆に、dialect が用いられてよいとき、作家はそれを要求される。しかし、一般のアメリカ人の話し方はどうかということは不問に付されている。その問いに答えるには、それを示す語

いとその用法が必要である。英語の変化は直線的なものではなかったが、変化が生じたのは、会話が narrative の中に用いられるようになってからであり、ついには、narrative prose が、会話の慣用に支配されるようになったのである。それは Hawthorne に始まり、Hemingway で終わったといってよい。」時代の推移とともに、gentility や decorum への顧慮が次第に消えたが、Hemingway において、そのための外的要因を求めれば、何よりも第一次大戦の経験であったといってよい。Hemingway は、vernacular が standard と実質的に一致した劇的な表現である。しかし、一方で、Hemingway を高く評価するのは、大いに美的考慮があることにも注意しなくてはならない。

いずれにせよ、現実の speech を作品に記録する場合の諸種の困難は、どの作家にも共通のものである。Mark Twain はその手紙で次のように記している。

The moment 'talk' is put into print you recognize that it is not what it was when you heard it ; you perceive that an immense something has disappeared from it. That is its soul.⁽¹¹⁾

現実には作品に載録されるのは、「青ざめて硬直し、顔をそむけたくなるような屍体」というわけである。同じ趣旨で、*American Dialects* の編者もつぎのようにいっている。

Most dialogue is written more or less "straight" so that the actor may find it difficult to superimpose dialect changes on erroneous grammatical forms.⁽¹²⁾

標準英語は、英語世界のひとびとの大多数が normal と認めるような英語であるべきだが、その識別は、とくに外国人であるわれわれにとって容易ではない。標準からの aberration の程度の微妙な差異は、native speakers であってさえ容易に識別し難いものがあると想像される。諸種の辞書類や、usage の解説書もすべての言語現象について教えてくれるわけではない。phonetic spelling (=misspelling) や語法違反に応じて、それを解説し、解釈するために要する調整の努力が非常に複雑なものであることは、英語国民自身のものでもある⁽¹³⁾。その調整の作業を analogy と呼ぶことは適当であろう。analogy といっても、ここでは発音について触れないことをはっきりさせておかななくてはならない。発音は、どの言語においても、もっとも重要な要素でありながら、もっとも克服し難い壁であること、前述の通り、アメリカ英語の中でも、発音上の方言差異が、他の文法範疇のそれより大で、顕著であること、また、ここでは、文学作品に見られる nonstandard に関心がはらわれていることなどがその理由である。

外国人であるわれわれは——かなりの年数にわたって英語を学習して、ある水準の英語の鑑賞力を身につけたわれわれは——諸種の辞書、文法書を通しての訓練のおかげで、ある英語の表現を見て、「これは正しい文である」また、「これは誤った文である」と、さらに、これは一層微妙なのだが、「この表現は許されるのではなからうか」、「この表現は正常から逸脱していると見るべきだ」などと判定できるようになっている。幻想ではけっしてなくて、現実にはわれわれが持っているはずの英語の標準的な規則的特性についての理解と、おそらく無限に変化に富む英語表現への応用力というものは、外国語であるための遠慮や自信の無さにもかかわらず、紛れもない事実と認めないわけにはいかない。それは二つの言語の構造を対照し、その間の不一致点に注目しつつ、直観的に身につけた洞察力といってよい。英語国民の子供が英語で聞き、話し、読み、書き、英語で思考し、さらには感ずるといった総合的、有機的な意味の習得と比べて、はるかに不純で不完全ではあるが、われわれが獲得する理解力と応用力が開拓される過程は、子供が母国語の用いられる環境から得る比較的わずかな資料の経験から、その言語についての無限ともいえる具体的に、現実的な表現形式への応用を可能とされる心的過程に相應するといえないであらうか。

発音、語形、統語と分けてみると、前にも触れたように、こと発音に関して外国人は決定的な handicap を負わされていて、たとえばどの発音が standard か nonstandard かの議論は実りの少ないものである。それは理論的、観念的なものに止まる場合が多いであろう。Standard とされる英語音体系の完全な習得でさえ難事なのだ。厳密にいうと、せいぜいで、発音表記法や音符を読んで、視覚的に音素的な区別、intonation の変化を知ることができるだけである。(国際発音記号を知らない英語国民がどれほど多いことだろうか。)

それに対して綴字の standard は比較的確立している。英語の場合、正字法についての根強い伝統があったし、包括的でしかも権威のある OED 以下の辞書編纂の成果が大きな働きをしている。Webster's New World Dictionary の Charlton Laird の論文はつぎのように述べている。「ことばを書くひとにとって綴りは厄介な問題ではある。しかし、辞書を作るひと、また用いるひとにとってさしたる困難はない。以前、英語の綴り方は混乱していて、ある語を綴る正しい形というものが無かった。しかし、現在はすべて事態は変って、綴りについては非常に厳密になっている。あまりにも厳密であるので言語のこの分野においてだけはおそらく「正確」という語の使用が許されるであらう。」⁽¹⁷⁾

統語的な usage については、正しい、あるいは、よい usage とは何かということは種々論議を呼ぶものであり、それは辞書編纂者の泣き所でもある。たとえば、American Heritage Dictionary の編纂に当たった Cornell 大学名誉教授の Morris Bishop は、相当の識見のあるひとびとの間でさえ意見の齟齬があり、good usage とはつかみ

所の無い妖精であって、掴まえようと思っても、形も衣裳も一定せず、その正体をつきとめることが困難であるといっている⁽¹⁸⁾。議論は仮説的で、果敢ないものになりそうである。Normal であるとの一般の諒解を得た英語を習得したひとが直観的にもっている判断力が正常と正常からの逸脱を計るのであるが、その正常ないし標準とはまったく不安定なものであり、したがって、それを根拠に行われる analogy も確定性は無いわけである。

英語の普遍的特性の習得にかなり近似したものがわれわれに可能であることは、子供がするその母国語の習得に相応するということは前にも指摘した通りである。しかし、そこに見られる違いは量的なものであるだけではなくて、本質的なものである。われわれ外国人のする英語の習得は少なくとも一般の学校教育では、二次的、間接的であり、多かれ少なかれ、知的、理論的であり、論理的規則性に束縛されている。また、随意的でもあり、学習の誘意性の有無、個人的必要度、運用の頻度によりその質量が変動する。それに対して、母国語の習得は、一次的、従って、絶対的であり、本能的、生理的なものである。文法的な適否の反省や考慮を伴わず、総合的、有機的である。ここに外国語の知識と理解の限界がある。しかし、現実には、われわれの学校文法の fiction 的で、解剖学的である弱点にもかかわらず、少なくとも、教育面でのその存在価値は否定できないのが実情である。また、文法とは教育のために設定された規範であるということの歴史的現実性から目をそむけることもできない。

とにかく、以上見てきたように、英語の standard とは何かの問題や、nonstandard への analogy の適用の効果とその方法には、われわれの場合、外国語であること、colloquial, dialectal の程度の識別の困難、そして、案内として頼るべき文献の相対的貧困など、数多くの難問がつきまとっているといわなくてはならない。

- (1) Sterling A. Leonard, *Current English Usage (Facts About Current English Usage)* (Appleton-Century Crofts, N.Y. 1938) p.137)
- (2) Richard Bridgman, *The Colloquial Style in America* (Oxford University Press, 1966), p.17—Bridgman は vernacular に対するものとして colloquial という用語を用いている。この二者は、一般に言語学で用いる langue と parole, language と speech の関係に相応するもので、アメリカで用いられ得る英語の総体を vernacular, それが現実に具体的表現となったものを colloquial とする。
- (3) Roy H. Copperud, *American Usage: The Consensus* (Van Nostrand Reinhold Company, 1970) p.v 参照
- (4) Albert H. Marckwardt and Fred G. Walcott, *Facts About Current English Usage* (Appleton-Century Crofts, N.Y. 1938) The Leonard Report も同書中に載録されている。
- (5) 同書 p.1
- (6) Lewis Herman and Marguerite Shalett Herman, *American Dialects, A Manual for Actors, Directors and Writers* (Theatre Arts Books, N.Y., 1947)
- (7) 同書 p.xi

- (8) E. Partridge, *Slang Today and Yesterday* (Routledge, London, 1935), p.305
- (9) Stephen Crane, *George's Mother*, ch.7
- (10) James Fenimore Cooper, *The Prairie* ch.23
- (11) Sarah Orne Jewett (1849-1909), *A White Heron* ch.1
- (12) Hamlin Garland (1860-1940), *The Return of a Private* ch.1
- (13) 前掲書 p.62
- (14) Mark Twain's Letters II, 504. (Harold C. Martin, *Style in Prose Fiction* (Columbia University Press, 1959) p.163)
- (15) Lewis Herman and Marguerite Shalett Herman, *American Dialects. A Manual for Actors Directors and Writers* (Theatre Arts Books, N.Y., 1947) p.5
- (16) Richard Bridgman, *The Colloquial Style in America* (Oxford University Press, 1966) p.29
- (17) *The Second College Edition of Webster's New World Dictionary of the American Language* (The World Publishing Company, 1970) 中の Charlton Laird, Language and the Dictionary, IV The Shapes of Words, p.xxi
- (18) *The American Heritage Dictionary of the English Language* (American Heritage Publishing Co., Inc. and Houghton Mifflin Company, 1969), p.xxiv